

序 論

ここでは、本論文『仏教図像の研究－図像と経典の関係を中心に－』の執筆目的とその方法、そして構成について述べておきたいと思う。

1. 本論文の目的

(1) 経典による図像の解明

本論文『仏教図像の研究－図像と経典の関係を中心に－』は、時代を、明らかに仏像が出現した紀元2世紀から、その造像活動のわが国に及ぶ8世紀までを対象としている。すなわち、仏像を中心として図像が現れる、いわゆる大乘仏教の中で、仏教教義上密教に対してとくに顕教と呼ばれる時代における図像を中心に、美術史上の解明を種々試みたものである。

これまで美術史の作品に対して、そこに何か根拠あるいは典拠があるのではないかとの思いを抱いて、自分なりに思索し研究に励み、その結果が本論文のテーマとなっているわけであるが、それまでは仏教美術の作品を見ている、仏教とどのように結びつき、それがいかなる意味を持ち、かつ必要とされたかなどについてあまり関心を持たず、むしろいかに美しいか、優れているか、素晴らしいかに心を奪われていたと言っていると思う。

かなり前のことであるが、美術史学会の全国大会で、平等院鳳凰堂の飛天の位置について、経典の儀軌をもとに報告した発表を聞き、私は目から鱗の落ちる思いがした¹。また同じく美術史学会の例会でも、教えを受けた先輩の法華経普門品変相の発表を聞き、深く感動したことを今思い出している²。なぜかと言うと、仏教美術を紐解く場合、その作品に何かその元になる経典があるはずだという視点が、膨大な仏典を背景とする仏教の場合、とくに欠かせないと思ったからである。もちろん典拠が曖昧な場合も多多あるけれども、それでもあまり関係ないとする立場に傾く気にはなれない。

仏教図像とは仏教の図像学を中心に、広く仏教に関わる壁画や尊像の類を指している。そして、歴史を超越しがちな仏教経典の記述からだけで、どれだけその図像の実像に迫ることができるかは疑問とする考え方も確かにある。あるいは、壁画や遺品は必ずしも経典と結びつくとは限らず、その安易な付会は許されないと指摘する人もいる。しかし、

¹ 松浦正昭「鳳凰堂飛天群像の主題について」1975年の研究発表を指す。翌年『美術史』97, に「鳳凰堂供養飛天群とその密教的性格」と題して掲載された。

² 吉村怜「南朝の法華経普門品変相－劉宋元嘉二年銘石刻画像の内容」1985年4月(於慶応大学)『仏教芸術』162, 1985, に掲載。

だからといって経典という資料を結果的に軽視してしまうことになるのは果たして如何なものであろうか。いわば問題解決の大事な手段をみすみす捨てることになりかねないであろうし、重要な仏教図像学という分野を切り捨てる行為にもつながってしまうとさえ言えるのではないかと思う。

図像の解明において、その内容が安易な付会であると批判する場合、それはあくまで部分的な手段に対する批判であって、図像の解明という全体の目的に対する批判に至っているわけではないと思われる。本論文では、文献に対応するできるだけ明らかな事例を選んで図像の解明を行っているため、周辺のリサーチが不足し、総体的に上記のような安易な付会、あるいは荒削りであるとの批判は甘んじて受けなければならないと反省するが、図像の解明という目的において今後更なる事例を加え補充することによってそれは解消されていくと考えている。

(2) 史実の解明

本論文では、美術史研究の手法を用いて史実を明らかにすることを基本目的としている。すなわち、美術史、考古学、歴史学、そして仏教文献学等に基づいて、美術品の示す意味とその歴史を解明しようと心掛けたわけで、とくに美術品の年代比定においては、科学的な炭素年代によるデータを重視するなどして、できる限り普遍的な結果を求めることに力を入れた。下記の方法の項においてもこの点をさらに説明するが、ただ、裏付けとする資料に限られている場合も多いので、今後資料を補うことも必要と考えている。

そして本論文では、遺跡を含む図像の年代比定において、これまで到達した水準を一步超えることをめざして取り組んだが、もしそれが達成されて斯学における学問の進展に多少なりとも寄与することになれば幸いである。そして、美術史研究が歴史研究の補助学問であるという、一つの枠に嵌められた世間の常識に対して一矢報いることになり、美術史研究の独立につながることになればと願うところである。

(3) 仏教東漸史の究明

本論文では、仏教東漸史を明らかにすることも視野に入れて研究を心掛けた。とくに小乗仏教と大乘仏教における信仰活動の違いは、これまでも仏教東漸史の過程において未解明のまま残されている部分が多く、これらをどのように理解するかは、実際今後委ねられた課題でもある。

本論文においては、第1部第1章『法華経』より見た神変像から、第2章『観無量寿経』による大神変図、第3章四天王の奉鉢と弥勒でこの問題を扱っている。そして第4章『華嚴経』ヴァイローチャナ仏の関わりにおいて、両石窟の活動年代が6世紀に位置づけられることを明らかにした点、これは仏教東漸史の新たな歴史像を提示するものと考えている。

また、図像と史料の関係において対象とした遺跡や寺院は、すべて同一年代あるいは初建というわけではなく、先代の遺跡があり、また後代の重修や再建の場合も視野に入れる必要があることを感じ、その解明に心がけた。第Ⅱ部第3章『法華経』と隋代の敦煌石窟、第4章『仏本行集経』と龍門古陽洞の歩歩生蓮図はその一例であり、新たな視点として仏教東漸史に寄与するはずである。

(4) 法華経の関わりを検証

本論文では仏教経典の最高峰と謳われる『法華経』による作例に注目し、これを検証することも視野に入れた。第Ⅰ部第1章『法華経』より見た神変像、第Ⅱ部第1章曇曜五窟と『法華経』、第Ⅲ部第1章中宮寺天寿国繡帳と『法華経』、第2章法隆寺夢殿八角円堂と本尊などがこれに該当する。もちろん他の資料も探求し、思索を重ねた結果としてこのような状況が生まれたわけであるが、『法華経』による作例は、中央アジア、中国、日本の三地域でいずれも見出すことが出来るため、仏教経典の最高峰と謳われるその意義を史実の面で多少なりとも明らかにしたと考えている。

2. 本論文の方法

(1) 遺品と文献史料とデータの照合

本論文では、美術品の作例（遺品）と、文献史料と、科学的データの三者を照合することを基本とした。美術史研究においては、美術品が中心となることは当然であるが、それが文献史料（資料）とどこまで結びつくか、それによって、その作品の美術史的価値が決まると言ってもいいであろう。けれども資料、特に仏典は、思想的背景をもつので、その思想的背景まで理解して用いることも心掛けた。また、研究は考古学的調査の進展と平行し、歴史研究の進歩とも平行するので、この分野との照合もできる限り行った。

とくに発掘調査により新たな成果が得られ、遺構や出土品の様式や年代が確定されることを通して、自己の研究に対してさらに確信を深めることにも繋がった。最近明らかになった日本古代美術史の分野で、奈良斑鳩法隆寺南大門前の発掘調査において、法隆寺再建論争の『日本書紀』西暦 670 年の罹災記事を裏付ける結果をもたらしていることなどはその好例である³。これは第Ⅲ部第3章薬師寺東塔擦銘と本尊の『薬師経』の中で触れている。

そして、なかでも炭素年代の測定結果は、誤差があるにしても貴重な裏づけとして用いることが出来ていて、本論文においては、第Ⅰ部第4章『華嚴経』ヴァイローチ

³ 平成 16 年度調査報告会資料(2005.3.5)および平成 18 年度年報(2007.3.3),奈良県内埋蔵文化財技術担当者連絡協議会。

ャナ仏の関わりがその恩恵に与っている。

(2) 先行論文の検証

各章の研究にあたっては、先学の論文をふまえてその一歩先をめざしたつもりである。先学の研究を広く参照し吟味することで、自己のオリジナリティーを生み出す貴重な宝庫の役割を果たしていると感じている。とくに第Ⅰ部第1章『法華経』より見た神変像や、第2章『観無量寿経』による大神変図、第4章『華嚴経』ヴァイローチャナ仏の関わり、第Ⅲ部第3章薬師寺の東塔擦銘と本尊の『薬師経』、第4章法隆寺金堂四大壁画と経典などは、この学恩に依るところが大きく、深く感謝するとともに、もし先学の研究に対して失礼にあたる点があるとするれば、学問上の進展を少しなりとも図ったことに免じてご寛恕を頂きたいと思う。

(3) 他の領域との連動

かつて美術史学会で古鏡における図像の問題で研究発表を申し出たところ、美術史でなく考古学の分野にふさわしいからという返事で、発表を断られたことがある。残念に思い、数年後再度申し込んでみたところ、今度は発表の許可を得ることができた⁴。

このように考古学や実地調査、仏教哲学や仏教史など、美術史以外の領域とテーマが交錯する場合は、上記のような問題を引き起こすことになる。けれども、学問の探求においては、他の領域とも連動して広く参照し総合的に考察して、最も妥当とする結論を導き出すことが真の目的であるから、本論文でもこの手法を取り入れることにやぶさかではない。第Ⅰ部第4章『華嚴経』ヴァイローチャナ仏の関わり、第Ⅱ部第4章『仏本行集経』と龍門古陽洞の歩歩生蓮図、第Ⅲ部第3章薬師寺東塔擦銘と本尊の『薬師経』がこれに結びついている。今日、学際的研究として領域を超えてあらゆる学問からヒントを得ることは、むしろ一般的な手法として常識になっている。

3. 本論文の構成

本論文の副題に掲げた経典と図像の関係は、先にも述べたが、これまで仏教美術の作品を見ていて、それが仏教とどのように結びつき、いかなる意味を持ち、かつ信仰上どのように必要とされたかなどについてあまり関心を持たなかったところである。改めてここに目を向けて研究した結果、相互の関係性において結びつきの得られた内容を本論文で明らかにしたつもりである。考えてみれば、仏教美術を学び紐解くとき、背景とし

⁴ 1984年度の美術史学会全国大会のこと。許可されたのは1989年「画像鏡に関する二、三の問題」(於京都大学)で、拙稿「西王母説話と画像鏡」『教育学部論集』28,創価大学,1990,となった。

ての経典に目を向けるべきであることは当然のことであるが、そこを強く意識しなかったのは一体なぜであろうか。あるいはすでに知っているつもりであったため、想わぬ陥穽があったと言ってもいいのであろうか。

本論文では経典と図像に関して、以下の3部構成にまとめ、合計12章を立てて論述している。

第Ⅰ部第1章『法華経』より見た神変像、第2章『観無量寿経』による大神変図、第3章四天王の奉鉢と弥勒、第4章『華嚴経』ヴァイローチャナ仏の関わり（以上中央アジア）。

第Ⅱ部第1章曇曜五窟と『法華経』、第2章『弥勒経』と敦煌第249窟の窟頂壁画、第3章『法華経』と隋代の敦煌石窟、第4章『仏本行集経』と龍門古陽洞の歩歩生蓮図（以上中国）。

第Ⅲ部第1章中宮寺天寿国繡帳と『法華経』、第2章法隆寺夢殿八角円堂と本尊、第3章薬師寺東塔檼銘と本尊の『薬師経』、第4章法隆寺金堂四大壁画と経典（以上日本）の計12章である。

本論文の構成と凡例をまとめると、以下の通りとなる。

(1) 序文では、本論文の目的と方法そして構成について述べている。タイトルに掲げた通り、経典による図像の解明と遺物の年代比定が、研究目的としての主要な柱である。

(2) 本論では、第Ⅰ部中央アジアにおける仏教図像と経典で1~4章、第Ⅱ部中国における仏教図像と経典で1~4章、第Ⅲ部わが国における仏教図像と経典で1~4章の合計12章をもって、西暦2世紀から8世紀のおよそ700年間にわたる仏教の図像と経典の関係について美術史の分野での作品の解明を試みている。

(3) 各章をテーマ毎で区切っているが、配列は各部いずれも時代順を心掛けている。とくに第Ⅰ部第4章『華嚴経』ヴァイローチャナ仏の関わりでは、バーミヤーンとキジルの両石窟がこれまでの4-5世紀ではなく、6世紀に位置づけられることを特色としている。

(4) 各部の結びでは、本論で展開した各章についてまとめ、筆者において新たな考察を行った部分の経緯を明らかにして、それが従来とどのように異なるか、すなわち学術的意義がどこにあるかを中心にまとめている。

(5) 結論では、各部に亘る経典の成立事情を概観し、各章で論じた事物について各部を越えた関係性について触れ、その結果得られた年代的な特色について述べている。

(6) 各ページの脚注に文献を入れ、原文を加えて本文と対照出来るようにし、その上で参考文献として一括して末尾に付して全体像を明らかにした。

(7) 出典原文の漢字は、基本的に当用漢字の字体を用いたが、必要に応じて旧字体を使用した場合がある。

(8) 図版は、三部構成の番号で各章ごとに分け、それぞれ末尾に出典を付記した。